グラフィカルな食品の国2

zen-aku

【グラフィカルな食品の国とは】

グラフィカルな食品の国は、食品たちが暮らしている国です。
食品たちの楽しみの一つは、国の中心に建っている大聖堂の窓をのぞきこむことです。
大聖堂には無数の窓があります。
窓をのぞくと、人間の暮らしが見えます。
別の窓をのぞくと、また別の人間の暮らしが見えます。
窓の一つ一つが別々の人間の暮らしを映しています。
食品たちは、人間の生活を見ることが大好きです。

そして、食品たちが人間の暮らしを見に来るのには、もう一つ理由があります。
この国では、人間の暮らしを見ると、食品たちが若返ります。
古くなったお米も、新鮮なお米に戻ります。
しなびたブドウも、瑞々しいブドウに戻ります。
この国の食品たちは、人間の暮らしを見ないでいると、次第に鮮度が落ち、腐り、朽ちて、消えてしまいます。
この国の食品たちは、人間の暮らしを見ることで、定期的に若返っています。
そして、何年も新鮮なままで元気に暮らしています。

【黄ニラ・アニマルロールケーキ】

お米のノガたは、蒜山（ひるぜん）焼きそばとお話していた。
「ぼくは、いつからここにいるんだっけ？」
「また忘れたの？」
「え？　前もこの話した？」
「したよ。ほんとにノガちゃんは忘れっぽいな」
「そうなのか！　それで、ぼくはいつからここにいるの？」
「…」

「あのさあ、僕の名前覚えてる？」蒜山焼きそばが言った。
「え？……　あのね……」
「じゃあ、あのひとの名前は？」蒜山焼きそばが、近くを通った黄ニラを指差した。
「んと……　ジャック？」
「あのひとは新入りだよ。この国に来て間がないんだ。ほら見て、だいぶ古くなって弱ってる」
「新入りか。じゃあ知らないよ。いじわるだなぁ」
「それなら、名前忘れるんじゃないよ」
「そうだね……　あのひとに、この国のことを教えてあげなくちゃ」
「あの黄ニラさんには、僕が教えてあげるよ。きみは僕の名前を思い出してね」
「…」
蒜山焼きそばは、黄ニラに駆け寄った。空を飛ぶ石に黄ニラを乗せて飛んで行った。

お米のノガたは、何をしようとしていたか忘れた。
「ぼくは、何をしようとしていたの？」
「そんなの知らないよ」左から声がした。
「そんなの知らないよ」右から声がした。
「そんなの知らないよ」前から声がした。
「そんなの知らないよ」後ろから声がした。
「そんなの知らないよ」上から声がした。
「そんなの知らないよ」下から声がした。
「え？誰。君たちカラフルだね」

「僕たちは、アニマルロールケーキだよ。」アニマルロールケーキたちが言った。
「初めまして、うしです」
「初めまして、とらです」
「初めまして、ひょうです」

「初めまして、きりんです」
「初めまして、しまうまです」
「初めまして、くまです」
「初めまして、お米のノガたです」お米のノガたが言った。

「ところで、アニマルロールケーキさん」　お米のノガたが目をパチパチさせながら聞いた。
「うしさん、ひょうさん、きりんさんは、それなりに牛柄、豹柄、キリン柄に見えますよ。
でも、くまさん。あなた、単に茶色のロールケーキじゃないんですか？」
「しーーーーーっ」
「とらさん、しまうまさん、あなたたち、単純なストライプじゃないですか。
ほかのみなさんがいるから『とら』や『しまうま』に見えますが、
いなかったら、『縞模様のロールケーキ』じゃないですか」
「それ、言わなくていいの！」

【終わりに】

アニマルロールケーキを作った人、頭いいなぁ。